

13. 胸腰椎術前後の QOL

岡山大学病院リハビリテーション部¹, 岡山大学整形外科²

○堅山 佳美¹, 千田 益生¹, 雑賀 建多¹, 尾崎 敏文²

【はじめに】

患者主体の QOL 評価は、現在の医学において、重要な基準となっている。中でも SF-36 は包括的 QOL 評価として高い評価を得ている。本研究では脊椎手術の術前と術後 1 カ月の SF-36 を評価した。

【対象と方法】

2010 年 4 月～2010 年 9 月までに岡山大学病院整形外科にて手術を行った 15 名（男性 11 名，女性 4 名）を対象とした。平均年齢 68 歳，疾患の内訳は腰部脊柱管狭窄症 10 名，変形性腰椎症 1 名，胸髄症 1 名腰椎圧迫骨折 1 名，胸椎黄色靭帯骨化症 1 名であった。術前に SF-36v2（日本語版）を調査し，日本国民標準値と比較した。また術後 1 カ月に再度 SF-36v2（日本語版）を行い，術前後の SF-36 の比較も行った。

SF-36 は 8 つのサブスケール[身体機能 (PF: Physical Functioning), 日常役割機能 (身体) (RP: Role Physical), 体の痛み (BP: Body Pain), 全体的健康感 (GH: General Health), 活力 (VT: Vitality), 社会生活機能 (SF: Social Functioning), 日常役割機能 (精神) (RE: Role Emotional), 心の健康 (MH: Mental Health) から構成されており，各サブスケールの得点は国民標準値を 50 点とし，その標準偏差を 10 点として，変換されており，高値ほど QOL が良好であることを示している。

【結果】

術前の SF-36 の下位尺度平均得点は，PF 18.4±18.8 点，RP 22.1±13.4 点，BP 33.4±9.1 点，GH 36.7±11.2 点，VT 39.0±9.9

点，SF 33.1±12.3 点，RE 30.2±17.66 点，MH 38.3±12.0 点であった。術後 1 カ月の SF-36 は PF 26.7±20.8 点，RP 25.8±16.5 点，BP 37.5±9.2 点，GH 40.8±10.4 点，VT 41.7±11.1 点，SF 36.9±17.6 点，RE 27.7±17.0 点，MH 42.3±12.4 点であった。術前後ともに，8 項目すべての得点で 50 点以下で日本国民標準値より低値であった。

術後 1 カ月では RE[日常役割機能(精神)]を除いて，術前より高値を示した。しかし，統計的に有意差があったのは，PF (身体機能)，BP (体の痛み) の 2 項目のみであった。

(図 1)

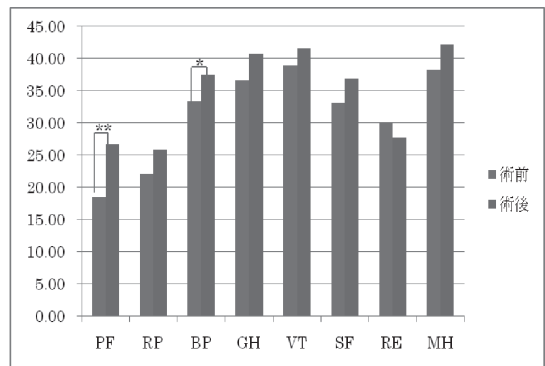


図 1 術前後の SF-36

【考察】

本研究では，PF (身体機能)，BP (体の痛み) の 2 項目について，術前・術後で有意差を認め，術後早期から痛みの軽減，身体機能の改善を自覚していると考えられる。

板橋らは，腰椎すべり症に対する低侵襲手術を施行し，術後 1 年の SF-36 で身体機能，身体の痛みの 2 尺度においてのみ有意な改善を認めた，と述べている。

北浜ら²⁾は、頸椎手術後、3ヶ月後から疼痛と心の健康状態は有意な改善を認めたと述べている。

また、術前より、身体機能だけでなく、精神機能においても低値を示しており、身体的にも精神的にも活動が妨げられていると感じていた。術後1カ月では、精神機能については、有意差をもって改善を示さず、更なる経過を追う必要がある。

【結語】

1. 胸腰椎疾患患者15名に対し、術前・術後1カ月にSF-36を行った。
2. 術前術後ともにSF-36の8項目すべてにおいて標準値より低値であった。
3. 術後1カ月において、PF、BPの2項目で有意差をもって改善を感じていた。

【文献】

- 1) 板橋泰斗，沼沢拓也，横山徹，小野睦，和田簡一郎，田澤浩司，藤哲：腰椎変性すべり症に対する棘間切除式椎弓間除圧術の成績．*Journal of Spine Research* 2010；1：1336-1341
- 2) 北浜義博，花北順哉，南学，安藤直人，高橋敏行，尾上信二，紀武志：脊椎手術の各種患者自己評価法の検討（第2報）頸椎疾患の分析．*脳神経外科ジャーナル* 2008；17：326-334